

## 富士紀行 (57) 春来る：巢立ちの時

(H13/3/19 記)

先日 (3/19) 校内で露の臺を発見した。春の息吹である。山頂降ろしの風も暖かく感じられ、陽差しもめっきりとその強さを増しつつあり、春の足跡の近づくを感じる昨今である。当地の冬の風物詩である東富士演習場の野焼きも大部分終了し、山菜が芽吹くのも近いものと思われる。

さて、富士紀行 33号で、〇〇富士について書いたけれども、北富士駐屯地に所在している部隊訓練評価隊の運用訓練幹部佐藤裕一等陸尉が撮影した日輪富士 (仮称) を紹介する。

春と言えば、卒業・入校の時期である。須走小学校の平成12年度第54回卒業証書授与式即ち卒業式に参列した。卒業生62名の進学先がこれ又面白い、地元の中学校に進学する子供が大半であるが、うち11名が北は北海道から南は熊本の各中学校に進学する予定であるという。子供達の6年間の延べ転出入児童数は、転入75名、転出86名とのことであり、転勤族たる自衛官の子弟の多い地域の学校であることを如実に物語っている。2時間弱の卒業式間の子供達の節度ある規律正しい動作が非常に新鮮であった。座っている子は微動だにせず、呼名された子は大きな返事ですくっと立ち、最前列まで直進、そこで右(左)折し、式壇中央前の待機位置前進、そこで来賓に礼、続いて教職員に廻れ右して同じく礼、壇上にて校長に正確な腰を折る敬礼、一步出て卒業証書を貰い一步下がって礼をして右左折して自己位置へ帰るのであるが、この間の動作が個人としても全体としても流れるかの如くで、見ていてとても気持ちが良かった。相当に訓練されたのだろう。子供達の躰や能力では、静岡県下有数の須走小学校ならではある。

須走小学校は、明治7年に、民家、社務所、寺院を教場として「開蒙舎」として創立されて、爾来岳東小学校と改称、昭和16年須走村国民学校、昭和22年須走小学校と改称され、平成12年度で、創立125年となる。昭和29年富士学校創立までは児童数も100人に満たなかったけれども、学校創立後児童数急増、最大時500名弱の児童数であった。今回の卒業生を含めると卒業生は3500名弱である。

小学校の校庭に二宮金次郎(尊徳)の芝を背負って本を読み耽る有名な銅像が置かれていたが、その横に「汗影」即ち汗する影(すがた)と称する銅像が建っていた。これは、日本彫刻会の巨匠朝倉文夫氏の息女で日展の審査員をも務めた朝倉響子女史の手になるものである。左手に分厚い本を持ち、右手に物差しを持った製本労働者の姿を現し、知識の源泉たる書物の大事さと、幾多の行程を経た本の最終段階の点検と完成の無上の喜びを表しているのだそうだ。「二宮金次郎」と「汗影」、そして地域の積極的な協力・連携があ

ればこそ須走の子供達はすくすくと育っていると言える。